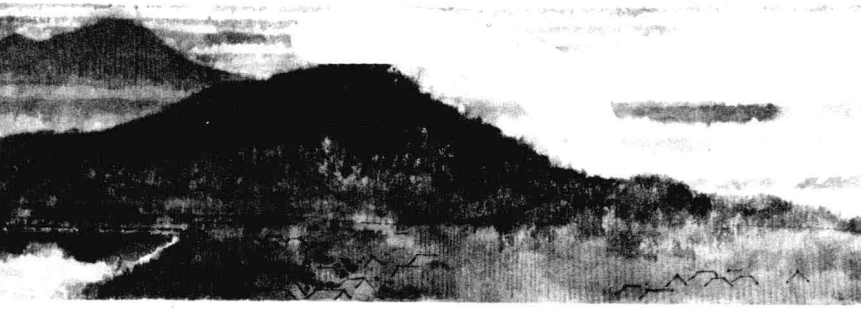
# 奈良飛鳥園

# 奈良飛鳥園

島村利正



新潮社版

奈良飛鳥園

昭和五十五年三月十日　発行
昭和五十五年五月十日　二刷

定価　一一〇〇円

著者　島村利正

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

〒162　東京都新宿区矢来町七一
電話東京（〇三）二六六一五一一一　業務部
（〇三）二六六一五四一一　編集部
振替　東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷　三晃印刷株式会社　製本　神田加藤製本株式会社

© by Toshimasa Shimamura 1980
Printed in Japan

# 奈良飛鳥園

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

# 一

京都駅を出発した列車が、奈良線の桃山御陵をすぎるころ、小川の顔に、ようやくやわらかい微笑がうかぶようになった。

その日、小川は故郷の姫路から招かれて、下鴨の山内の下宿先である料亭、相模屋の亭へ、荒田にはじめて案内されてから、ずっと緊張しつづけていた。白皙明眸という言葉のよく似合う、寡黙な青年で、和服に袴をつけていた。小川はその年、二十五歳、晴陽という雅号で、第十二回文展に初入選した異色の新進洋画家であった。

山内と荒田は、京都帝国大学法学部の学生であった。山内はのちに、「チボー家の人々」など、多くの名訳をのこし、すぐれた仏文学者として知られる山内義雄である。荒田数馬は、講道館三段の風変りな学生。京都の花街、先斗町で土地のヤクザを対手に武勇伝をつくり、新聞に書かれたりしたが、山内とはウマの合う友だちであった。

大正七年、十月のことである。

小川は三年前の大正四年、看護卒として、故郷の姫路歩兵第十聯隊で兵役に従事していたとき、一年志願で入隊していた荒田と知合った。荒田が疑似赤痢で衛戍病院に入院したとき、小川の親切な看護を受けたことが知友になるきっかけであった。京都帝大法科の学生で、柔道の猛者という異色人物に小川は興味を持ったが、荒田のほうも、東京で有名な丸木写真館で修業して、一本立ちの出来る写真師でありながら、洋画家が志望という小川に特別の親しみと興味を覚えたようだ。ふたりはこれが縁で、除隊後一、二回文通したことがあった。

「ぼくは子供のころから心臓弁膜症があって、軍隊など縁がないと思っていましたが、看護卒にとられて、かえって軀に自信がつきました」

小川は衛戍病院で、荒田にそんな風にはなしたことがある。

「本名は晴二なんです。しかし、絵のほうは晴暘です。丸木利陽先生が阝扁の陽をくれたのですが、それを日扁の暘に直したんです」

小川はいつかは文展に出してみたいと云いながら、名前のいわれをはなした。荒田はそれらの言葉を覚えていた。だが、小川がこれほど早く文展に入選するとは思わなかった。意外であった。そのころの文展初入選はたいへんなことである。荒田はある朝、新聞の顔写真の入った紹介記事を発見し、びっくりして椅子から立ちあがった。人違いではないかと何回も読み返したほどだ。白いガウンを着て、軍医や看護婦と一緒に立ちはたらいていた小川の姿と、髪を七三にわけた顔写真とがなかなか結びつかなかった。

小川が姫路で、荒田からの祝いの手紙を受取ったのは、初入選の文展を見に上京する直前であった。小川は東京から帰って、自分で撮影しておいた入選作「雪解けの頃」の写真と一緒に、あらためて荒田に礼状を出した。出品作はワットマン半紙、二十号ほどの水彩画である。

荒田は、この絵は青森県弘前の雪景色です、と書いてある小川の手紙を読みながら、鉄道が漸く通じた東北地方をいつ旅行したのだろうと、そのことにも驚きを覚えた。荒田は山内に小川のことをはなし、「雪解けの頃」の写真も見せた。美術学校も出ていない、そして特別の師匠や先輩を持たない、独学の新鋭画家として新聞も大きく扱っており、山内もつよい興味を持った。

「小川晴暘は二十五歳か。その齢で文展へ入選するひとはいないことはないが、丸木利陽のところで三年も修業した若い写真師というのが面白いな」

山内は小川より二歳若く、そのとき二十三歳。東京外国語学校のフランス語科を出てから京都帝大にきたが、外語のころから、すでに優婉な近代詩をつくっていた。京都帝大を希望したのは、当時、「海潮音」の上田敏が文科の教授をしていて、その講義を聴きたいためであった。しかし、実兄が文科を許さず、止むを得ず法科に籍を置いていた。

荒田は小川に何か祝いの品を贈りたいと云って苦慮していた。荒田は金がなかった。山内が応援を申出た。山内も小川に会いたい気持があった。

「ふたりで招待しようじゃないか、ぼくも会ってみたいような気持がする。金はおふくろが三十円送ってくれたばかりだからぼくに任せてくれ。京都より奈良のほうが風景に古代の感じがあって典雅だから、お祝いに奈良を案内してあげたらどうだろう。古い寺や仏像は、絵を描く上でもいい勉強になるかも知れないよ」

山内の申し出は荒田を喜ばせた。荒田は小川への招待の手紙のなかに、山内のこともくわしく書きこんだ。

荒田は豪放で、自分は芸術など解らないと常に云っていたが、実際にはフランス文学を中心とする山内の勉強ぶりと学殖に、年上というだけでなくふかい敬意を持っていた。そして、山内が

「帝国文学」に発表した詩も読んでいた。ギリシャやローマなどの古い建築や絵画、そしてフランスの近代絵画、そのほか奈良、京都の古社寺や仏像に関する文献資料を集めていることも知っていた。

## 入日

華やかな太陽の下に、
うす色の風景が浮び、暮れがたの
並木はまたさびしい勤行の鐘に薄れゆく。
遠いとほい運河の岸に僧侶の袈裟が光る。

昔死んだ道化の美しい限どりのやうに
水脈の上にまどろむ秋の太陽は、
旧いこころの上にみえわかぬ創傷を索み
しめやかな風は畑地のうへに伸びてゆく。

日を浴びて
寺の扉の金は燦き
僧侶はまた水ちかく立つて何かしら瞻めつつ
真直な運河のうへを夢がとぶ。

この詩は大正二年二月一日発行の「帝国文学」に載ったもので、山内十八歳のときの作品である。荒田はこれを手紙のなかに書きこんで、こんな詩もつくるひとです、と紹介した。荒田にとっては山内も自慢の友だちであった。山内は京都の寺々をはじめ、奈良もすでに三回も歩いていた。……

「ぼくは奈良ははじめてなんです。この奈良線もはじめてです」

小川は前の座席の山内と荒田に、そんな風に云った。奈良に向っている汽車は、平等院のある宇治を通っていった。山内が小川にはなしかけた。

「ぼくは東京ですから、芝の丸木写真館も知っています。姉も母も、あそこで撮って貰ったことがあるんです」

「ぼくは大正三年の徴兵検査のときに丸木を辞めているんですが、あるいは山内さんの御家族の写真も、焼付けをしているかも知れませんね」

山内の姉は上田敏夫人と女学校時代からの友だちであった。山内は小川の東京弁が嬉しく、姉のこともちょっとはなしたりした。

「この奈良線の沿線には、宇治の平等院をはじめ、藤原時代の寺が多いんですよ」

そのころは鉄道省編纂の「日本案内記」や「お寺まゐり」もまだなかったが、山内はこの辺の寺もくわしいようであった。山城をはしる汽車の窓からは、山裾を彩る孟宗竹の豊かな林が見えた。

「この辺の竹林はふかくて味がありますね。あの風のそよぎを見ていると描きたくなります」

小川ははじめて絵かきらしい口調になった。笑うと眼尻にやさしい線がこぼれ出たが、風景を見つめる眼には思いのほか鋭いひかりがあった。山内と荒田は、これが画家の眼かとも思ったが、

また、レンズを覗く写真家の眼はこんな風かも知れないと思ったりした。汽車は奈良のひとつ手前の、木津にかかっていた。

奈良に奈良帝室博物館が開館したのは京都帝室博物館より三年早く、明治二十八年四月二十九日である。京都から木津まであった鉄道が、さらに木津から奈良まで繋がり、京都、奈良直通線として完成したのは明治二十九年四月である。大阪湊町から奈良までは明治二十五年二月に開通しており、名古屋から伊勢の亀山、そして笠置、木津、奈良経由の関西本線もだんだんに繋がって、そのころ開通している。またいまの近鉄の前身である大軌（大阪電気軌道株式会社）が、大阪上本町六丁目から奈良まで開通したのは大正三年四月三十日。小川が山内と荒田に伴われて奈良を案内して貰ったこのときは、奈良をめぐる交通網は大体出来ていたことになる。しかし、奈良は、すぐれた多くの古社寺を有しながら、現在のような観光都市としての貌（かお）を持たず、むしろ立派な古社寺があるために、いっそう廃都の感じがふかかった。

奈良の町が市になったのは明治三十一年である。この侘しいような市に、歩兵第五十三聯隊が出来たのは明治四十一年。しかし、その翌年の四十二年には、全国で二つしかない女高師、奈良女子高等師範学校がひらかれ、また立派な県立の奈良図書館も設けられている。……

木津からひくい山波を越えると、もう右手はるかに平城宮址の見える奈良である。むかしの一条大路を越えると、左手に奈良の街や、まるい若草山、そして原生林に覆われた春日山が見えてくる。

奈良駅は古都に相応しい神殿風のつくりであった。三人が奈良駅に降り立ったときは、午後三時ごろであったろうか。駅前広場に、客待ちの人力俥が二十台ぐらいならんでいた。自動車は一台もなかった。三人は真ッ直ぐの三条通りをぶらぶら歩いていった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「この通りの突き当りが春日神社になる」
三条通りはまだ古風な面影を持っていた。鹿除けの格子を前面にしつらえた、むかしのままの仕舞屋風の家も何軒かあった。またそのなかに、新らしい観光客目当ての、新建ちの旅館も見えた。古墨と大きくしるして、筆墨類を売る店もある。間もなく興福寺の坂が見えてきた。その辺から土産物屋が多くなる。左手が興福寺の伽藍と杜。坂の右下が猿沢の池。そこからが奈良公園だ。鹿が何頭も寄ってくる。三人は猿沢の池のまわりをゆっくり歩いた。亀がいっぱいいた。立派な角を持つ牡鹿が近寄ってくると怖い感じがあった。池畔の柳のところから興福寺の五重の塔を見あげると、五層から上の九輪、水煙、宝珠に夕陽が当って、澄んだ秋空を背景に荘厳な感じがあった。小川は感動していた。猿沢の池から広い石段をのぼり、三条通りを越えて、興福寺の境内にはいると、五重の塔と重厚な東金堂が胸を圧してくる。
「この老松は見事ですね。あの塔やお堂を、この松が一本で受けて立っていますね」
小川がつよい口調で云った。山内と荒田は、小川が素直に感動してくれるのが嬉しかった。その松は花の松とよばれ、樹齢も何百年かを経た有名な老松であった。小川の云う通り、その剛い幹や見事な枝ぶりは、このふたつの堂塔の重みを受けて、すこしもひけを取らない感じがあった。
三人はそこから、夕暮のなかを近くの南円堂に詣り、さらに北円堂をまわって、三条通りにもどると、附近に宿をさがした。猿沢の池の近くに何軒かあった。興福寺と向き合って、大文字屋というのがあった。帳場格子のなかで、番頭が帳面をつけているのが表から見えたが、そこには電燈はなく、むかしながらの四角い行灯を使っていた。
「こりゃあいいや、いかにも奈良の旅籠らしい。ここにしようや」
山内は小川と荒田を見ながらそう云った。小川の顔に微笑がうかんだ。小川はすでに東北から

北海道までひとりで歩いていて、実際には旅馴れていた。

鹿の声が聞こえる。昨夜も三人で二、三本の酒を飲みながら、その声を聞いた。宿の前の三条通りにも、裏手のほうにも、鹿が何頭もいる感じがした。奈良は鹿の声で暮れ、鹿の声で明けてくる。……三人は朝飯に向いながら、そんな風に思った。ミイとひくく鳴く声もあったが、笛のようにつよく透る声もある。秋の交尾期で、牡が牝を呼んでいるのだ。昼の握り飯をつくって貰った。もうひと晩泊るつもりであった。

そとに出ると霧がふかかった。眼の前の五重の塔もかすんでいる。思わぬ風景に、三人はびっくりした。小川は、

「素晴らしいですね。写真機を持ってくればよかったな」

と、つぶやくように云って眼を輝やかせた。興福寺の境内も霧がふかかったが、春日神社への真ッ直ぐの参道はいっそうふかい霧に閉ざされて、山の高原の感じがあった。一の鳥居のところで車止めになっている。

「これを左にゆけば般若寺の前を通って、奈良から京都へのむかしの街道になる。右は奈良ホテルですよ」

三条通りと交叉しているその通りは、公園を横切る樹木のふかい美しい道であった。むかしの平城京の東端、東京極大路になる。

奈良ホテルは鉄道省の管理で、明治四十二年から営業していた。山内はこの前一回泊ったことがある。興福寺大乗院の庭であったという、池を控えた丘陵に建てられたホテルは、窓の大きな一風変った木造二階建てであった。ルネッサンス風の日本銀行旧本店や、赤煉瓦の東京駅を建て

た辰野金吾の設計であった。山内は右手への坂をちょっと下り、手短かに説明しながら、その辺の風景も見せた。

一の鳥居から参道を進むと、朝日がだんだんに射してきた。道の両側には太い樹木がつらなり、なかには朽ち倒れているのもある。樹木の影を映しながら、霧がゆっくり流れる。鹿の影も映っている。

「あの建物が帝室博物館ですよ。この辺が浅茅ヶ原というんです」

博物館は左手の林のなかに見えたが、浅茅ヶ原は右側であった。参道からそのゆるやかな丘にのぼると、鷲池が見おろせた。あたりには梅の木もあった。上み手に雪消の沢がひろがっている。霧がだんだんに薄れてくる。

「池の向うのあのあたりに、天平の石仏のある頭塔の森というのがあるんですが、新薬師寺へいきましょう。これも天平時代の寺ですから古いものですよ」

山内は奈良の古美術に特に精しいわけではなかったが、京都大学でいくつかの資料を見ていた。明治十九年から政府の委嘱に基き、米人アーネスト・フェノロサの手によって行われた日本古美術の調査は、明治三十年十二月を第一回としてはじまる国宝指定の基本となったが、山内はその国宝資料の写しも見ていた。そのほかすでに著名であった歴史学者、内藤湖南、古社寺研究で知られた喜田貞吉の資料、そして、天沼俊一の建築史記録も覗いていた。また東京美術学校編纂の古美術記録や、東京帝国大学、関野貞教授の美術史の講義記録も見ていた。和辻哲郎も関野貞の講義をもとに、このころ古寺巡礼を企てている。

丹坂をのぼり、ほそい土塀道を右にまがる。白毫寺へゆく道もこの道だと、山内が云った。

新薬師寺の正門、南の四脚門からはいる。そのころは庫裡へいって拝観を頼まなければならな

い。ここでは拝観料の定めはなく、あとで適当な謝礼を置く。境内は荒涼としていた。

「お早いお参りですな」

坊さんが出てきて、本堂の扉をあけてくれる。小川は朝のひかりのなかで、はじめて千二百年の歴史を持つ古い寺の匂いを嗅いだ。線香の匂いだけではなかった。本堂中央を大きく占める円い土壇の匂いと、木造建築の匂いが入り混っている。いや、土壇の上の、くすんだようなほとけたちの匂いかも知れない。

坊さんが寺の来歴を簡単にはなし、仏像の説明をすこし早口で喋った。東大寺の別院で、聖武天皇の眼病平癒祈願のため、光明皇后が建立された。そして行基の手で開山されている。土壇中央の大きな坐像が本尊、薬師如来。まわりの像は薬師の教法を護持する十二神将。そのほかのほとけの説明もした。巨きな眼を持つ薬師如来は異様に見えた。

「この本尊は木造だというんです。まわりの十二神将は塑造なんだ」

山内は坊さんに遠慮するように、ひくい声で云った。小川は四、五年前に、丸木写真館から通った絵画塾、太平洋画会研究所で石膏もいじったことがあり、彫刻にも興味を持っていた。しかしそれは、西欧的な彫塑術の第一歩であって、寺にある仏像を彫刻と考えるには、気持の上でちょっと距離があった。そのころの一般的な日本人の気持といってもいいようであった。木造は木彫り、この塑造は粘土だろうか。……小川は本尊に向って礼拝しながら、故郷の姫路で知っている寺と、趣きが随分違うと思った。昨夕の興福寺は外観だけであったが、新薬師寺も興福寺も、これから廻る東大寺も、死者の葬祭には関係のない寺だと山内に教えられていた。小川はそれが不思議に思えるのと同時に、千年以上もの歳月を経てきたこの寺には、現世では忘れられた祈りがあると思った。そして、忘れられたその祈りが、これらの仏像を支えているようにも思えた。

円い土壇の上に立ちならぶ十二神将を、三人は仰ぎ見ながらゆっくり廻った。彩色の剝落した、等身大に近いこの塑像は、本尊とは感じがまったく違っていた。木彫と塑像の違いもあったが、それだけではないように思われた。製作された時代も違うかも知れない。小川はこのときは、そんな風にしか観察出来なかったが、十二神将の肩や胴のくびれに人間の軀の線が感じられて、山内が昨日、奈良のほとけは美術品ですよ、と云った言葉がはじめて納得出来るような気がした。小川が京都の宿に訪ねたとき、山内は奈良を知らない小川と荒田のために、奈良の歴史や風景の美しさを手早く語ったあとで、芭蕉の俳句、

菊の香や奈良にはふるき仏達

そのほか奈良を詠んだ俳句も教えたが、さらに、仏像を美術品ですよ、と云った。小川は雑誌「白樺」を愛読していた。大正五年に出た高村光太郎訳編の「ロダンの言葉」も好きな本のひとつであった。それらの本から知っていた近代彫刻の線が、十二神将の立姿につながるように思われたのだ。しかし、この内陣の感じはなんといったらよいだろうか、寺であっても、いや、たしかに日本の寺でありながら、ロダンよりも遠い、どこか異域の風情が感じられるのは何故だろう。十二神将の表情の怪異さからくるのだろうか。

小川たちは本堂から出ると、萩の庭を歩いて、小堂のなかにある二尺近い金銅仏、香薬師像を見た。聖武天皇の念持仏であったという。貸してくれるロウソクの灯りで見た。本堂のほとけたちよりさらに古いという小ぶりな像は、青黒い感じで不思議な微笑をうかべていた。豊かでありながら清楚な笑いの表情は何を云おうとしているのだろう。ほとけの慈悲を現わしているのに違いなかったが、この香薬師や本堂のほとけの作者は、いったい、どんなひとたちなのだろう。熱烈な仏教信者なのか、それとも外国から渡来した、単なる仏師か、または西欧風な、彫刻家とし

新薬師寺　香薬師像

ての腕のいい芸術家なのだろうか。

新薬師寺を出て、三人で土塀道を歩きながら、小川は不思議な興奮と一種の不安を感じていた。自分は画家であるという気持のなかで、ほとけたちの迫力、それをいっぱいに感じながら、そのまま素直に胸のなかで理解出来ない不安であった。

雪消の沢にふたたび出て、こんどは春日神社にいった。小川は馬酔木の群生をはじめて見た。真ッ黒に見えていた春日の森は、さすがに深い感じがあった。千八百基を越えるという石燈籠を縫って、若宮や丹塗りの廻廊を持つ本殿を廻った。新薬師寺には荒涼とした感じと、胸を圧してくる一種の怕さがあったが、ここには日本風の荘厳さはあっても、その怕さはなかった。人間の匂いがつよく感じられるのは、釣燈籠千基をふくめた、三千基からの寄進燈籠の姿がそれを醸し出しているのかも知れない。周囲のふかい森は、秋の色も混えて美しかった。風景の好きな小川は、それにいっそうつよく心を奪われていた。

「春日神社は興福寺とふかい関係にあったから、このお宮にはどこか寺の感じもあるんですよ」

山内は森の小道を先きに立って歩きながら、独言のようにそんなことも云った。小川はその言



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo